

東北学院大学ボラスステ活動報告書 ～2018 WEB 版～



東北学院大学災害ボランティアステーション
大学間連携災害ボランティアネットワーク
復興大学災害ボランティアステーション

目次

1. 定期ボランティア活動の概要	1
(1) 被災地域の課題とねらい	
(2) 定期ボランティア活動の意義	
(3) 学生スタッフ代表インタビュー	
2. 定期ボランティア活動レポート	3
(1) 気仙沼市仮設住宅・復興公営住宅支援活動	
(2) 石巻市雄勝町支援活動	
(3) 石巻市牡鹿半島小湊浜漁業支援活動	
(4) 七ヶ浜町復興公営住宅支援活動	
(5) 山元町地域・農業復興支援活動	
(6) 仙台市太白区あすと長町災害復興公営住宅支援活動	
3. ボランティア研修プログラム等	9

1 定期ボランティア活動の概要

01

被災地域の
課題とねらい

東日本大震災の発災直後から災害・復興ボランティア活動に関わって8年。今、被災地域の大きな課題の一つに、震災記憶の風化にともない潜在化しつつある**被災者の孤立**が挙げられます。これを防ぐためには、**被災地域住民が主体となったコミュニティ再生**が必要です。そのために私たちは「息の長い、地域に根ざしたボランティア活動」を行い、見えにくくなっていく各地域の対人支援に関わるニーズに対して、住民同士や学生が可視化できるようにコミュニティを作っていくことを目指しています。また、一つでも多くの地域にコミュニティ再生の輪を広げていけるよう活動しています。

被災地域の課題	今年度実施した取り組み	活動地域	定期活動開始時期	これまでに取り組んだ活動(定期・短期含む)
仮設住宅から災害復興公営住宅へ完全移転するにあたり生じる多様なニーズの把握。移転後のコミュニティの創出、強化。	・仮設住宅・集団移転団地・災害復興公営住宅で住民間交流の機会を創出 ・住居周辺環境整備活動	気仙沼市	2011年	屋外清掃活動、洗浄整理、写真修復、仮設住宅支援、景観復旧支援、復興支援インターンシップ、スタディバスツアー
災害復興公営住宅移転後の高齢者から子どもまで幅広い年齢層からなるコミュニティの創出、強化。独居高齢者の引きこもり防止。	・住民間交流の機会を創出 ・地域の催事運営補助	宮城郡七ヶ浜町	2011年	仮設住宅支援、海岸清掃、足湯活動、催事運営支援、子ども支援、学習支援、災害公営住宅支援
	・足湯活動 ・住民間交流の機会を創出	仙台市太白区あすと長町	2017年	引っ越し支援、足湯活動、災害公営住宅支援
震災後の地域住民人口の減少。それに伴う地域での催事の継続困難。	・農業補助活動 ・住民間交流の機会を創出 ・地域の催事運営補助	亘理郡山元町	2011年	学習支援、仮設住宅支援、農業支援、催事運営支援、スタディバスツアー
	・交流人口の増加に向けた関連施設の復旧支援活動 ・地域の催事運営補助	石巻市雄勝町	2014年	避難所支援、学習支援、園芸施設復旧支援、催事運営支援、スタディバスツアー
漁業の担い手不足。住民間交流の減少。	・漁業の復興 ・住民間交流の機会を創出 ・地域の催事運営補助 ・学生ボランティア増加を促進する仕掛けづくり	石巻市牡鹿半島	2015年	漁業支援、観光地復旧支援、スタディバスツアー、催事運営支援、子ども支援



Staff Meeting



Let's Supporting Together



Have Fun!



現在、宮城県内の沿岸部を中心とした複数の地域で、対人のボランティア活動を基礎として展開しています。持続的なボランティア活動を展開するには、地域資源という観点から学生ボランティアの存在が不可欠です。

また、別な視点では、定期ボランティア活動を行うことにより学生ボランティアが、時が経過し風化しつつある**発災直後の動きや、これまでの災害ボランティア活動のプロセスを「学び」、その学びから現在の活動に繋げるもしくは「続ける」、さらには、自らが今の動きを後世に「伝える」というようなサイクルを形成すること**となります。このようなサイクルが動くことにより、学生ボランティア人材を継続的に育成・輩出することにも取り組んでいます。

定期ボランティア活動の意義



▲雄勝・園芸施設での復旧支援活動
◀気仙沼・反松仮設住宅でのクリスマス会

学生スタッフ代表インタビュー

大学生になって「何か自分の成長につながることをしたい」と思っていたときに、たまたま看板が立っていて、何の気なしに友達と足を踏み入れたのが僕のボラステとの出会いです。当時気仙沼での活動のグループリーダーをしていた先輩の人柄や活動に対する姿勢に感銘を受け、この人についていきたいと思って気仙沼で活動することに決めました。

初めて活動に参加してからもう少しで3年になります。現地コーディネーターの村上さんを中心に、住民さんが気軽に接して下さって、活動初日から人の温かさに気仙沼の魅力を感じたと同時に、そんな気仙沼の方たちのために何かしたいと思ったことを今でも覚えています。現在、街には防潮堤が立ち、目に見える形で復興を感じます。また、イベントに来てくださる住民さんの数が昨年より増え、会話も回を重ねるごとに多くなります。楽しく参加して下さっているのを見てわかり、心の面でも余裕ができて少しずつ前に向かっていくように思います。これは毎月活動に訪れている僕たちだからこその気づきで、「心の復興」の助けになっているのかなと思います。

ボラステでは代表として活動運営面、組織運営面ともに楽しくやりがいを感じていますし、そのやりがいが成長につながっています。活動中も住民さんとの信頼関係を築き強めることを大切に、態度や言動に気を配るなど、憧れの先輩に近づけるように努力をしてきたことが自分の中で大きな経験となっています。

心の復興に携わることが、やりがい、成長に。

これまでの活動で印象に残っている出来事は、今年度の夏ボラで初めて唐桑の東舞根という地域でイベントを企画した際、企画の大変さに不安もありましたが、住民さんが「来てくれてありがとう、また来てね。」と涙を流しながら言ってくださったことです。自分たちの活動が認められた、自分たちが「その場においていい」と教えていただいたようで、それ以降の活動の心よりどころになっています。

震災から8年目となり復興も着々と進む中で、ボランティアや被災地に対する思いが学生のなかで薄れてきています。定期活動やバスツアーを企画するだけでなく、被災地の魅力や震災直後に起きたこと、今起きていることを伝え続けることがボラステ学生スタッフの役割として必要になると思います。

また、活動に来てくださる住民さんたちには、引き続き「楽しみを共有するひと」、「心のよりどころ」、ご高齢の方にとっては「孫」のような存在であればと思います。そうなれるような環境をつくっていききたいし、後輩にも思いを継いでもらいたいと思っています。

ボラステも9年目を迎えるにあたって、活動によっては次の復興の段階に進む必要があるもの、ニーズが増えてきている地域、取捨選択が必要な定期活動以外の活動もあるので、代表として先頭に立って推進していきます。



教養学部
地域構想学科2年
河原 颯

2 定期ボランティア活動レポート

1 気仙沼 仮設住宅・復興公営住宅支援活動

震災からまもなく8年。活動内容は変化しているものの今も活動を続けています。訪れることでわかる気仙沼の魅力、地域の方々の暖かさ。ぜひ一緒に活動してみませんか？



2018年度の活動紹介

4月	環境整備活動（牧沢仮設住宅）、南最知仮設住宅視察
5月	食事会、ビンゴ大会（牧沢仮設住宅）
6月	除草作業、清掃活動（牧沢仮設住宅）
7月	除草作業、交流会（かき氷）（反松仮設住宅）
8月	夏ボラ（2泊3日）
9月	環境整備・清掃活動、医療支援（牧沢仮設住宅）
10月	ハロウィンパーティ（唐桑町東舞根）
11月	環境整備・清掃作業（反松仮設住宅）
12月	クリスマスパーティ（反松仮設住宅）
1月	
2月	環境整備活動（牧沢仮設住宅）
3月	交流会

学生スタッフへのインタビュー

———過去のものになる前に、伝え繫げたい。

僕が気仙沼を活動拠点として選んだのは、気仙沼の方々が暖かく家族のように迎えてくださったことと、気仙沼で活動する先輩方の真摯な姿勢にあこがれたからです。

活動の中で住民さんから「ありがとう」という声掛けをもらったり、同年代の学生から「気仙沼っていいところだね」と言われたり、一般の参加者と住民さんが一緒にお話しているのを目の当たりにすると、スタッフとして関わってよかったと思えます。

昨年夏ボラに参加した経験は、グループリーダーを引き受ける決断に大きく影響しました。今年も初めて訪れた方やリピーターの方にも気仙沼の魅力を伝えられるよう新しい企画も加えつつ準備を進めていきます。また、今年は定期活動3拠点のうち2か所の仮設住宅が撤収の予定と、変化の年となりそうです。これまでの活動で培った信頼関係を継続しつつ、新しい活動先を見つけないかと。それに伴い、今までの仮設住宅にお住まいの高齢の方を対象とし



経済学部経済学科1年
佐藤 拓末
気仙沼グループリーダー

た活動から、復興公営住宅等での子ども向けの長期休み学習会や遊びといった企画も始まりそうです。

最初は「ボランティア」と聞いて、お堅く重労働な印象がありましたが、復興の段階や時期によって様々な活動があると知りました。東北では今、人とのコミュニケーションがボランティアにつながっていると実感しています。まだ被災地に足を運んだことがない方にも気軽に来て、8年前に震災があって壊滅的になっていた地域も今は元に戻りつつあることや住んでいる方も明るく元気に過ごしているということを、目で見て改めて地域の良さを知ってほしいです。そして、また行きたいと思ってもらえればと思います。

また、伝えることも僕たちの役割だと思っています。年号も変わり、月日の流れとともに過去のものは後ろに投げられてしまいます。その前にいろんな人に知ってもらい、さらに仲間を集めて一緒に活動したいです。



1. 牧沢仮設住宅にて開催したお食事会とビンゴ大会。
2. 住民さんが暮らす環境を整備する仮設住宅の清掃活動。
3. 気仙沼での夏ボラは震災の傷跡が残る地域を訪問。

私達のグループは主にローズファクトリーガーデンで活動しており、現地の依頼によりイベント運営の活動も行っております。東日本大震災から8年目を迎えますが雄勝町は他の地域に比べて復興が進んでいないのが現状です。私達のグループは雄勝町の復興と発展のためこれからも活動していきたいです。



2018年度の活動紹介

4月	
5月	石巻バスツアー
6月	バラ祭り運営補助
7月	ウニ祭り運営補助、園芸施設運営補助
8月	夏ボラ（2泊3日）
9月	秋ボラ（大学間連携合宿形式ボランティア）
10月	海鮮祭り運営支援
11月	
12月	園芸施設運営支援
1月	
2月	
3月	園芸施設運営支援

学生スタッフへのインタビュー

———それぞれの方法で「復興」し、小さな変化に喜ぼう。



法律学部法律学科2年
佐藤 亮太
雄勝グループリーダー

僕はもともと県内出身で、小学6年生の時に学校で被災し、家も全壊で一時住めなくなった経験があります。震災に関心はあったものの、中学・高校ともできず「大学でやろう」と思ったことが、私がボラステのスタッフになった理由です。

僕が活動する雄勝はあまりメディアに取り上げられる地域ではありません。初めて雄勝に訪れたときはすでに震災から5、6年たっていました。メディアは被災地の復興した部分しか放送しないので復興は進んでいると勝手に錯覚していましたが、いざ行ってみるとインフラは整備されておらず建物も立っていなかったためショックを受けました。雄勝に関わり始めて約2年が経ち、地域としての大きな変化のひとつは雄勝のシンボルだった海が見えなくなったことです。工事が本格的に始まり、防潮堤や道路ができてインフラが整いつつあります。一方これま

で海と一緒に生きてきた住民さんの中には、やるせない気持ちを抱いている方もいらっしゃいます。「復興」と一言と言っても地域によって進捗やアプローチ、受け止め方も異なることを知りました。

雄勝は住民さんが少なく、毎年夏ボラで取り組む灯籠流しなど、学生の運営補助があつて成り立つ催事もあります。そんな時に住民さんからの「ありがとう」の言葉にやりがいを感じています。また、手作業で行う園芸施設での作業では小さくても変化を実感するとやってよかったと感じます。園芸施設の復旧作業は終盤を迎えているので、今後は力仕事よりも、雄勝の魅力を伝えて集客するほうに注力していきます。

ボランティア活動は関わるひとの年代や地域も幅広く、いざやってみると人と関わることの楽しさを感じられます。ぜひ参加してみてください。



1. 新入生や一般生向けに被災地の今を知る春のバスツアー。
2. 毎夏開催している、ウニ祭りには運営補助として関わる。
3. 雄勝町の夏ボラは震災で亡くなった方を悼む灯籠流しのイベント運営補助も実施。

石巻市牡鹿半島にある小淵浜では、震災以降の人口減少に伴い、働き手の不足が深刻な課題になっています。その課題の一助に成るべく、「からこさし」といった牡蠣の養殖に使う道具づくりのお手伝いや、ワカメやメカブの加工工程をお手伝いしています。



2018年度の活動紹介

4月	漁業支援
5月	漁業支援、イベント打ち合わせ
6月	漁業支援（からこさし）
7月	漁業支援（1泊2日での活動）
8月	漁業支援、夏ボラ（2泊3日）
9月	漁業支援、イベント打ち合わせ
10月	
11月	漁業支援（からこさし）
12月	現地交流スタディツアー、牡蠣祭り運営補助
1月	
2月	
3月	春ボラ（ワカメ、メカブの収穫）

学生スタッフへのインタビュー

———今ある繋がりを大切に、これからも必要とされる活動を。



経営学部経営学科2年

阿部 弘夢

牡鹿グループリーダー

私がボラステのスタッフになったのは、私自身石巻出身で、東日本大震災時に県外のいろんな方から支援を受けた経験があり、石巻にいる私が地元の役に立ちたかったからです。

牡鹿での活動は、漁業支援のほか、夏ボラや牡蠣祭りなど、イベントに重心を置いています。私が4代目のリーダーで、今年で5年目ですが、年々ボラステの活動が地域の人々の認識の中にも定着化してきています。牡蠣祭りの運営補助活動は4回目を向かえ、ボラステの活動に対する住民さんからの期待値も上がっています。

また、住民さんとの距離が近いことが牡鹿の特徴です。特定の団体や行政の企画補助ではなく、個々の漁師さんの家で漁業支援するため、活動をすればするほど関わりが深まって愛着がわき、さらに石巻が好きになりました。

活動をしていてやりがいを感じるのは、必要とし

てくれていることが実感できた時です。「次回はワカメの収穫だね、頼むよ。」「地域交流会等イベントがないと集まる機会がないから、企画してくれて嬉しい。」等の言葉を聞くとやってよかったと感じます。

今後についても、現行の活動をどれだけ長く続けられるかが大切だと感じています。そのためにも、計画的に広報活動を行って一緒に活動してくれる参加者を増やしたいと考えています。

ボランティアにハードルを感じる方も多いかもしれませんが、現地の方は誰でも優しく受け入れてくださるので、気軽に来てほしいです。また時間やお金のことを考えるアルバイトと違い、誰かに言われてやるのではなく自分からやるものなので、「この人のためになりたい」という感情で動けるのはボランティアならではのものだと思います。自主性が培われ、自分の価値観が成長する機会にもなるので、ぜひ活動募集を見かけたら目を通してみてください。



1. 牡鹿ならではの漁業支援ボランティア、からこさし。
2. 夏ボラでは漁業支援だけでなく語り部を聞き復興街づくり情報交流館に足を運ぶ。
3. 毎冬開催される牡蠣祭りの運営補助は今年で4回目。

2015年12月から菖蒲田浜復興公営住宅で活動をしています。月に一度交流会を開くことによって高齢の住民の方の引きこもりを防ぎ、コミュニティの再形成を目標に活動しています。また地元のイベントにも参加し、地域の活性化を手助けしています。



2018年度の活動紹介

4月	交流会（なぞなぞクイズ）
5月	交流会（ボーリング）、 すまいるフェスタ運営補助
6月	交流会（すごろくゲーム）
7月	
8月	交流会（かき氷）
9月	交流会（芋煮会）
10月	あさひ園まつり運営補助
11月	交流会（鍋）、 みお七ヶ浜まつり運営補助
12月	クリスマス・クラフト・マルシェ 運営補助
1月	あそぶさございん運営補助
2月	交流会（豆まき）
3月	交流会

学生スタッフへのインタビュー

———交流する場をつくるボランティアを考える。



経済学部経済学科2年
菅野 江梨佳
七ヶ浜グループリーダー

東日本大震災当時、私は6年生でした。仙台市内の実家は停電し、2日間くらいは周りの大人や中学生が炊き出しをしてくれていました。そんななか、小学生の私はただ支援を受ける側で、何もできなかったという思いが強くありました。東北学院大学に入学後、まだ被災地へのボランティア活動があることを知り、正直驚きましたが、機会があるならやりたいと思いボラステのスタッフになりました。

ボラステが七ヶ浜で活動を始めたのは2011年11月からで、仮設住宅から復興公営住宅に移って今年で3年になります。私は1年生の秋に初めて七ヶ浜の活動に参加しましたが、住民さんとの交流が暖かく新鮮でした。初めのころはどのように話したらいいのかかわからず緊張していましたが、いまは家に帰るような感覚で行けるようになって、とても楽しく活動しています。

食事会をしたある日、住民さんのひとりがぼろっと「いつも一人で食べるから、みんなで食べるとおいしいな」と話してくださったことをよく覚えています。やはりつながりが大切なのだと感じます。

最近よく考えることは、交流する場をつくる「支援」はいつまで必要なのだろう、ということです。明確な終わりがいいことですが、活動の有無にかかわらず仲の良い人はいつも仲が良いなかで、ただ続けることは避けたいです。それでも集まれるきっかけづくり等、学生の力でできることがあるならできる限り続けていきたいです。また、地域の芋煮会など自発的なイベントもあるので、そういう動きがもっと増えていけば、私たちが「支援」という形で行かなくてもいいかなと思います。でも、私たち世代とおしゃべりするのが楽しいという声もあるので、そういう感覚ならいつまででも行けますね。



1. 菖蒲田浜復興公営住宅にて定期的に企画している交流会。
2. 芋煮会等、復興公営住宅で催す行事の運営補助も担う。
3. 地域のお祭りの一つ、みお七ヶ浜まつりでの運営補助ボランティア。

2014年から県南地域の山元町でも定期での活動を開始しました。主に地域住民さんの交流活動のお手伝いなどをメインに活動しています。



2018年度の活動紹介

4月	スタディバスツアー、農業支援
5月	農業支援、サロン運営支援（マルシェ）
6月	農業支援、サロン運営支援（カフェ）、イベント運営補助
7月	サロン運営支援
8月	農業支援、夏ボラ（2泊3日）
9月	サロン運営支援（マルシェ）、環境整備支援
10月	農業支援、サロン運営支援（カフェ） コダナリエ設置支援
11月	コダナリエ設置支援
12月	農業支援、マルシェ運営支援（カフェ） コダナリエ設置支援
1月	コダナリエ設置支援、サロン運営支援（マルシェ）
2月	マルシェ運営支援（カフェ）
3月	イベント運営補助

学生スタッフへのインタビュー

———そこにおいてできることをするだけで、ボランティア。



経営学部経営学科2年
引地 優太
山元町グループリーダー

高校時代からボランティアに興味はありましたが、勉強や生徒会でいそがしくて携われず、東北学院大学入学後にボラステがあることを知ってスタッフになりました。当時は震災から6年がたち、ボランティア不要論が問われるなかで、現地に足を運ぶとまだまだ必要とされていることを実感しました。

私が山元町を活動の主な拠点に選んだのは、県北沿岸部は報道等で震災復興の様子がよく取り上げられ注目されやすい一方で、県南の沿岸部地域も人口流出等、甚大な被害があると知り、自分ができるところをやると思ったからです。

山元町は人口流出を抑えることを目的に活動している団体もあり、人がつながり、関係が深まりやすい地域です。

学生だから何か特別なスキルを持って活動しているわけではありませんが、住民の方は「来てくれて

よかった」と毎回言ってくれます。いるだけで、今の自分にできることをするだけで、ボランティアになれるということに大きいやりがいを感じます。

今年は、これまでの山元夢ファームでの活動に加えて普門寺でのカフェやマルシェの運営補助も始まりました。今ある活動を継続していくことがまず第一の目標です。長期的には、七ヶ浜や気仙沼グループのように復興公営住宅とつながり、交流会等開いていきたいとも思っています。

私は最初にボランティアをしたとき、何をしたらいいのかわからず、また、人とのコミュニケーションも得意ではありませんでした。それでもだんだん慣れていくうちに、人との触れ合いを通してコミュニケーション能力は高まり、様々なことを学べました。そういったことに関心がある方もぜひ参加してもらえればと思います。



1. 山元町夢ファームでの農業支援、桑の葉茶づくり。
2. 今年度から始まった普門寺・寺カフェ、寺マルシェの運営補助。
3. 山元町の冬の風物詩、コダナリエの設置補助。

あすと長町グループでは、月に1回、3棟の災害復興公営住宅を対象として、お茶会や食事会の活動を行なっています。毎回、幅広い年代の住民の方が20名程度来てくださり、皆さんと楽しく交流をしています。今後も、ニーズに合った活動を行ない、コミュニティを形成していきたいと考えています。



2018年度の活動紹介

4月	
5月	交流会（お茶会）
6月	交流会（お茶会）
7月	交流会（たこ焼）
8月	
9月	交流会（お団子）
10月	交流会（ハロウィン）
11月	交流会（芋煮会）
12月	交流会（クリスマス）
1月	
2月	交流会（お茶会）
3月	交流会（たこ焼）

学生スタッフへのインタビュー

———立ち上げ期ならではの試行錯誤を経て、継続へ。



法律学部法律学科2年
高橋 侑希

あすと長町グループリーダー

私は入学式の時にボラステのことを知り、私自身長町の実家で被災した経験もあって被災地のためにできることがあればと思いスタッフになりました。

あすと長町災害復興公営住宅での支援活動は2017年12月から始まり、今年新たにグループ活動として立ち上がりました。私は住民さんのコミュニティをつくることに関心があり、立ち上げの時期から活動しています。

最初は足湯を実施していましたがニーズが合いませんでした。昨年7月にたこ焼パーティを企画し、交流会に近い形にしたところたくさんの住民さんが足を運んでくれました。それ以降、子どもを含め、リピーターで来てくださる方も増えています。住民さんの求めていることに気づくことが大事だという気づきを得た出来事です。「毎回来てくれてうれしい」「いつもは一人だけど、交流会に参加できて楽しい」という言葉が聞けたときはやりがいを感じます。

現在、3棟ある公営住宅のうち1棟を活動拠点としていますが、チラシはすべての棟に配布していて、住民さんもそれぞれの棟から来てくださっているため、今後は開催場所もローテーションで実施したいと思っています。そのためには、各棟の自治会長さんとの連絡や学生スタッフを増やす必要があります。また、活動内容もカラオケ大会等様々なことに挑戦していきたいです。

まだ立ち上がったばかりで、これからもどんどん改善・変化していく活動だと思いますが、まずは継続していけるように頑張りたいです。

ボランティアと聞くと難しいとか意識高い人がやるものと考えて、きっかけがないと始めにくいかもしれませんが、やってみると楽しいので、気軽に参加してほしいです。ボラステ通信の掲示場所を増やす等ボラステの活動を知ってもらえるように、広報面でも工夫していきます。



1. 10月に開催したハロウィンパーティ。
2. 11月に開催した芋煮会。
3. 12月に開催したクリスマス会。住民さんのリクエストに応えつつ月に一回開催している。

3 ボランティア研修プログラム等

災害支援活動

平成 30 年度に発生した災害における被災地支援の一助となるように、被災地での復旧活動や学内での募金活動を実施しました。また、中継機能の役割として支援物資の提供も実施しました。

1 平成 30 年 7 月豪雨災害支援活動

○現地活動

活動内容：被災した家屋の泥かきや片付けなど

岡山県倉敷市（全 5 クール）

7/13(金)- 7/28(土)- 8/14(火)-
7/18(水) 7/31(火) 8/17(金)

9/4(火)- 10/27(土)-
9/7(金) 10/28(日)

広島県三原市
(1 クール)

8/8(水)-
8/12(日)


○中継機能：支援物資の提供

2018 年 7 月 14 日(土)

- (1) 保存水 2 リットル×6 本×100 ケースを山元夢ファーム経由で岡山県へ提供
- (2) 保存水 2 リットル×6 本×100 ケースを山元夢ファーム経由で愛媛県へ提供

○その他の中継機能

2018 年 7 月 6 日(金)

東京在住の個人が寄贈を希望した七段雛飾りの中継
⇒みやぎ生協経由山元夢ファームへ 2 セット輸送 

○募金活動

期 間：

(第 1 期) 2018 年 7 月 12 日(木)～7 月 19 日(木)

(第 2 期) 2018 年 7 月 24 日(火)～8 月 3 日(金)

募金総額：225,655 円 ⇒2018 年 8 月 10 日(金)日本赤十字社へ送金

2 山形県最上郡戸沢村豪雨災害支援活動

期 間：2018 年 8 月 22 日(水)

活動内容：被災した家屋の泥かきや片付けなど

3 平成 30 年北海道胆振東部地震災害支援活動

期 間：2018 年 9 月 13 日(木)～9 月 21 日(金) 活動内容：募金活動

募金総額：154,308 円 ⇒2018 年 10 月 9 日(火)日本赤十字社へ送金



広島県三原市における平成 30 年 7 月豪雨災害ボランティア活動 引率職員の声

8 月 8 日から 12 日にかけて、日本財団学生ボランティアセンター（通称 Gakuvo＝ガクボ）による「平成 30 年 7 月豪雨ボランティア第一陣」に参加する学生たちを引率して広島県三原市へ行ってきた。

参加学生は 18 名。内 10 名が東北学院大学の学生で、他に東北福祉大学 5 名、東北大学 1 名、日本大学 1 名、創価大学大学院 1 名という構成で、男子学生は 12 名、女子学生は 6 名だった。

旅程を除き、実際にボランティア活動を行ったのは 9 日から 11 日の 3 日間。連日 30 度を超す暑さの中、怪我や感染症予防のためヘルメットとゴーグル、防塵マスクを着用し、長袖長ズボンで汗だくになりながら活動した。

活動内容を簡単に紹介すると、一日目は民家の床下の土砂出し、二日目は土砂が崩れ落ちた田んぼ脇の側溝の土砂出しと用水路の泥出しを行った。活動最終日の三日目は三つのグループに分かれて活動した。二つのグループはそれぞれ民家の床下に潜っての泥出しで、もう一つのグループは民家の根太（ねだ）に付着した泥の拭き取りと乾燥した庭の泥の掻き出しを行った。いずれも重労働

と言える活動だったが、チームワーク良く成果を上げることができた。夜は毎晩振り返りの時間を設け、当日の活動で感じたこと、翌日の活動に対する課題や抱負、そして大学に戻ったのち被災地に何ができるかの三点について話し合った。短い時間だったが活発な意見交換や感情の吐き出しができて、とても有意義だった。

私は Gakuvo の引率は今回が初めてだったが、これまで東北学院大学災害ボランティアステーションを通じて幾度も学生ボランティアを被災地に引率してきた。毎回思うことだが、学生たちをボランティアとして被災地に送り込むことの意義を今回も強く感じた。学生たちは初対面同士でもすぐに打ち解け、明るく朗らかに体力があり、それぞれの能力を適材適所で生かすことに素早く順応できる。ご高齢の方が多いボランティア依頼者から孫のように可愛がられ、受け入れられやすい。そして何より学生たちは未来の自分が何をすべきかを考えるきっかけとして災害ボランティアを捉えることができる。こうした学生が持つ可能性を生かした災害ボランティア活動が今後も継続されていくことを強く願う。

(施設部施設課 曾根邦敏)

(以下、参加学生からの活動報告レポートより)

「ぼうさいこくたい」は政府や企業、ボランティア団体を中心となり、災害の多い日本でどのように災害と向き合い被害を防ぐのかを考えるイベントだ。今回大きく取り上げられたのは、首都直下地震の被害の大きさを伝える展示である。その被害ははかりしれず、特に津波や火災による被害が多くなると予想されるが、このような大災害の被害を最小限にするための様々な製品やサービスが紹介されていた。たとえば南海トラフ巨大地震や首都直下地震で津波が押し寄せ、避けるのが困難である場合に、カプセルのようなものに入って安全を確保したり、電波が繋がらない状況でも無線で連絡を取ることが出来るようなシステムである。今後大きな災害が予想されるが、それを防ぎようのないものと諦めるのではなく対処していく術を見つけていくことが大切だ。

本会には学生スタッフの佐々木慶也と河原颯が参加し、活動の紹介をした。愛知県や宮城県など全国からいろいろな大学の職員の方や一般の方々が聞きに来てくださった。活動紹介を聞いてくれた方々は、「ずっと継続してやっているのがすごい」

という言葉であったり、「活動の幅が広く、選択肢が多いのはとても魅力的」と言ってくださったり、評価されたことはとても嬉しかった。ボランティアステーションは規模も大きくなるにつれ、やることも増えてきている。それを多くの人に知ってもらい、多くの方にボランティアに関わってもらえるような環境を作るのも学生スタッフの使命だと考える。

東日本大震災を経験した私たちは、今後の地震災害の被害を減らすために経験を伝承し続けなければいけないと考える。いつどこでどのような災害が起きるかは分からない。それに備える準備をし、起きた時にいち早く動く事も、日頃から災害ボランティアをしている私たちの使命だ。(佐々木慶也)



PICK
UP!

社会福祉協議会との連携協働事業

10/27



若林区災害ボランティアセンター 設置・運営訓練

若林区内在住の地域住民、地域福祉活動者、災害ボランティアセンター設置予定施設や関連機関とともに、状況設置訓練と現場検証を行いました。災害ボランティアセンターの位置づけ

や役割について認識を共有し、被災者に寄り添った対応について考えを深める機会となりました。



2/21



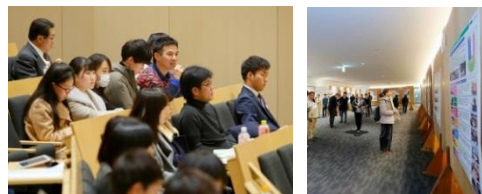
仙台市ボランティアセンター 運営サポーター養成講座

災害に備えて、災害ボランティアセンターの支援力を高め、ボランティア活動を通じた助け合い、支えあいを推進することを目的に仙台市ボランティアセンターと共催で養成講座を開催しました。20名が参加して運営サポーターの役割について学んだり、ロールプレイングを実施しました。



「災害の時代と大学、そしてボランティア」

東北学院大学土樋キャンパスのホーイ記念館ホール（地階）において平成 30 年度大学間連携ボランティアシンポジウム「災害の時代と大学、そしてボランティア」が開催されました。本シンポジウムは、学生ボランティアのあり方を考える機会として、東日本大震災の発災年から毎年開かれています。今年度も日本では自然災害が多発し、被災地は甚大な被害を受けました。沢山の学生ボランティアが全国から駆けつけ、学生間交流を行いながら、活動取組の課題等の共有を行い、学生ボランティアの意義を高めていくシンポジウムとなりました。



【寄稿】 パネルディスカッションを振り返って

午後の二つ目のプログラム、パネルディスカッション「災害における学生ボランティアの意義」を担当した共働プラットホームの杉浦健です。

ここでは災害ボランティアの主軸となっている「学生」に注目し、その学生がどのような思いで災害と向き合い、アクションを起こしたのか。そしてそれをどうやって引き継いでいくのかについて語っていただきました。

パネラーは熊本学園大学の原田素良さん、常葉大学（静岡県）の松浦莉子さん、中央大学（東京都）の恵良友貴さん、東北大学（宮城県）の山本賢さん、そして東北学院大学の河原颯さん。5人の現役学生です。

以下にこちらから投げかけた質問と、それに対する回答をまとめました。



Q. 「東日本大震災（2011年）、または熊本地震（2016年）など、災害ボランティアとしてこれまで活動してきたモチベーションはどこから来ているのでしょうか？これまでに活動をやめてしまった団体や個人も数多くあります。しかし、皆さんは続けてきたわけです。この『続ける』ということに対する思いを聞かせてください」

A. 「団体としての目的意識や災害に対する危機感があったことが大きいです」

「活動を続ける中で、ボランティアがどんどん好きになっていきました」

「現地で出会った人たちとの交流から思いが積み重なっていきました」

「さまざまな活動地域に関わっていますが、地域によ

って支援のフェーズが違ってきます。特にゴールが見えないところについては、続けていかなければいけないという思いが強かったです」

「阪神・淡路大震災のスタディツアーで、『被災地のことを忘れない』という言葉が出てきました。それが支援につながり、何かをしたいという気持ちに発展しました」

Q. 「活動を続ける中で、そんなモチベーションが下がってしまうことはありましたか？」

A. 「同じ大学の学生にボランティアをやっていることを知ってもらえなかったことです」
「だんだん注目されなくなってくると、資金も集まらなくなってきました」
「理念ばかりが先行してしまい、その理念に合わない活動をやろうとすると、『この団体としてするべきなの

か』といってもめてしまうことがありました」
「遠隔地から熊本へ支援に行くと、『わざわざ行かなくてもいいのでは？』といわれました」
「ボランティアのイメージが固いことです。それを同じ学生から指摘されました」

Q. 「ボランティアとは、ボランティアをやりたい人とボランティアをやってほしい人の両方がいてはじめて成立します。今後、被災地でのボランティアニーズがなくなってきたら、そのあと何をしますか？」

A. 「新しい活動先を探します。一つの被災地に拘らず、求められればどこへだって行きます」
「その地域に貢献したいのであれば、かたちが変わっても関わり続けます。たとえば祭りの手伝いとか、ス



タディツアーを企画するというのでも」
「何をもってハッピーエンドなのかを考えます。活動をやめてしまうのではなく、コミュニティを支えるためにも関わり続けていかなければならないと思います」
「南海トラフ地震など、今後起こり得る大災害のために、今までの経験を生かして地元で新たな活動を始めることも考えています」
「支援を求める人が一人でもいれば、支援は続けます」

Q. 「これから先、皆さんが卒業したあと、皆さんの活動は続いていると思いますか？たとえば20年先はどうなっていると思いますか？」

A. 「団体は存在していると思います。いや、存在してほしいです」
「自分たちが関わってきた場所とつながってほしいという気持ちがあれば続いているはず」
「そのときの状況に応じて学生たちが対応できるかに

よると思います」
「関わってくれる教職員に依存するところが大きいので、いいコーディネーターに巡り会えたら続いていると思います」
「発展的に解消するなど、続いていないと思います」

(杉浦) 当たり前ですが、学生は卒業したら学生ではなくなります。卒業後、所属団体がどうなっているのかを想像するのは難しいでしょう。しかし、一旦活動が終わったとしても、そこで培ったDNAはずっと継承されていくはず。20年も経って、そもそもこの活動は元は何から始まったのかを、そのときの現役学生が誰も覚えていなくても、根っこが災害ボランティアであったというDNAだけは生き続けるのです。たとえそれが直接災害ボランティアに関わる活動とは違うものになっても構いません。

Q. 「それでは、今日のパネルディスカッションを終えて、皆さんは明日からどうしますか？」

A. 「ほかの学生にも活動を知ってもらうために、今やるべきボランティアの準備をします」
「ボランティアをやりたいという気持ちが続く限り、活動を続けていきます。そして学びや思いを伝えていきたいです」
「自分たちが培ってきたマインドを後輩たちにアドバイスしていきたいです」

「自分ができることを少しずつ、後輩に引き継いでいきます」
「後輩にはもっと視野を広げてほしいです。そのために活動を伝えていきます」



(杉浦) 今日この場に集まった学生参加者は、東日本大震災当時は全員が小学生か中学生でした。しかし、それが時を経て、大学生となり、さまざまな災害ボランティアに携わるようになりました。その原動力は、発災当時、現役で頑張っていた先輩たちが培い残してきたDNAによるものです。つまり、自分たちのやりたいこと、自分たちのできることを、伝え続けていくことこそが、今ここにいる学生に求められる最大のミッションだと考えます。
「皆さんは明日からどうしますか？」それを想像することで、自分たちのあり方が見えてきます。もちろんやめても構わない。しかしDNAは間違いなく生き続け、引き継がれます。

参加者にも同じ質問を投げかけ、思いを共有し、ディスカッションは終わりました。

共働プラットホーム 代表・ボランティアコーディネーター 杉浦 健氏
(大学間連携災害ボランティアシンポジウム コーディネーター)

